



人の先生 恥辱のくすぐりおっぱいダンスの刑

くすぐらんど

う。まして美人のこんな姿は、滅多に見れるものではありません。

「あははっ！ 先生ったらケツでかすぎっ！」

「臭いからこつち向けないでよっ！ 最低ーっ！」

「おしりの穴も全部見えてるよ、先生ー」

先生のお尻も決して大きすぎるわけではありません。胸やウエストとのバランスを考えると、由香里先生のスタイルはモデルのように抜群に良い方です。しかし華奢で発育途上の女子生徒たちから見れば、大人の女性がお尻を振り回す姿は、迫力あるものに思えて笑えるのかもしれませんが。

一方の由香里先生は、遙か年下の女子生徒たちにここまで恥をかかされても、相も変わらず、必死におしりを振り続けます。半狂乱に笑い悶えながら「あはははははははっ！ もう許してぐだぎいっーははははははははっ！」と、生徒たちに媚びを売るように、おしりを突き出し、クネクネとふりつ

づけます。

その様子もしばらく観察していると納得がいきます。

他の女子生徒たちが、笑い転げたり囃し立てたりしている中、由香里先生にピツタリと張り付いたまま、動じずにこちよこちよし続ける生徒が1人いるのです。どうやらこの1人のくすぐりが滅法に上手いようでした。

この生徒の名前は井出水真紀。真紀は幼少期から全国のピアノコンクールで3年連続の優勝をするほどの腕前で、その繊細かつ高速な指遣いには自信がありました。流れるような指遣い、強弱のメリハリ、左右両手での異なるリズムや動きの操り、そんなプロの腕前でこちよこちよされたら、大人の女性でもひとたまりもありませんでした。

真紀が、腋の下をくすぐる指の動きを少しだけ変化させるたびに、由香里先生は狂ったような声で笑い悶え、ときに

数カ月前―

由香里先生は東京からこの女子生徒後の学校に転校してきました。

綺麗な長い髪をなびかせ、大人の女性のスラっとした高身長と豊満な胸や腰。モデルのように小さな顔。くつきりした目鼻立ち。大きくて綺麗な瞳。転校初日から、男子生徒からは「すごい美人の先生がきた」と評判でした。

一方で、由香里先生は女子生徒からの人気はイマイチでした。

教師にしては露出の多い服装をしたり、男子生徒を注意するときもまるで誘惑するかのような女性っぽい振る舞いや声を出したり。本人が自覚的かどうかはさておき、さも「大人の女性の魅力」を意識して見せつけるような振る舞いは、女子生徒たちの反感を買いました。

「男子生徒の人气が欲しいだけでしょ」「男子生徒に媚びすぎ」と、クラスの女子生徒たちは次第に由香里先生を敵視するようになります。その決定打となった事件がありました。ある女子生徒の彼氏が、由香里先生に告白したのを一部の生徒が目撃したのです。

もちろん、由香里先生は「何もないわよ」と女子生徒たちに弁明しました。しかしその後も男子生徒の前で魅惑的に振る舞う（ように見える）由香里先生の姿に、女子生徒たちとの溝はどんどん深まるようになりました。実のところ、由香里先生自身はそんなつもりは全くなかったのです。しかし田舎の学校で、同年代の女教師に比べて、由香里先生はあまりに魅力的すぎました。

そして、ついにその日はおきました。

女子生徒たち20人ほどが、由香里先生を騙して放課後の音楽室に呼び出したのです。生徒数の少ないその学校では、音楽室はほとんどピアノ特待生の真紀の貸し切り状態。放課後の音楽室に来る人などほとんどいない上に、完璧な防

音なので、外からは人がいるのかどうかもわかりませんでした。

女子生徒たちは、先生に謝罪と「今後、男子生徒たちの前でカツコつけないこと」「もつと地味な服装をしてこころ」となどを要求しました。

しかしプライドの高い由香里先生は、この生意気な女子生徒たちの集団抗議を嘲笑しました。先生からすると、田舎学校の地味な女子生徒たちに、上から目線で服装や態度のことを注意されるのがプライドにさわったのです。由香里先生もまだ負けず嫌いな26歳の若い女性でした。

美人の由香里先生は、昔から女からのこのような嫉妬やイヤモンにはうんざりしていました。学生時代の同級生や先輩にも、こういうことを言ってくる人はたくさんいました。由香里先生からすれば、「男子たちが勝手に言い寄ってくるのに、なぜ私が責められなくちゃいけないの?」と思うのも当然です。

口喧嘩のようになった挙句、とうとう「女ならみつともなく嫉妬しないで、まず自分の魅力を磨きなさい」とまで言い放ったのです。先生の大人げないこの発言には、女子生徒たちも激高しました。

女子生徒たちは、最初から「もし交渉が決裂したらどうするか?」を話し合ってたて決まっていた。どのみち、担任の先生を騙して音楽室に呼びつけて集団で抗議するなど、バレたら停学は免れません。そのため、もし先生が言うことを聞かなかつた場合、どうするか? 女子生徒たちは密かに話し合いを進めていたのです。

その結果、生まれた案がくすぐりです。

くすぐりなら身体を傷つけることもないし、万が一、あとで問題になっても暴力ほど重大な問題にならないだろう。先生もくすぐりなら自分がされたことを職員会議で報告し

ずらいんじゃないかー。そう考えた生徒がいました。そして他の女子生徒たちも同調したのです。

女子生徒たち20人は、一斉に全員で由香里先生を床に押しえつけてくすぐりはじめました。

このときの様子は、その場にいた20人の女子生徒しか知りません。

しかしその場にいた1人の女子生徒によると、それは壮絶なくすぐり地獄だったようです。

ー最初、私たちはそこまでくすぐりが効くのか、少し半信半疑でした。

でもくすぐりはじめると、すぐに由香里先生がすごくくすぐったがりでこちよこちよに弱いことに気づきました。

ある女性生徒はそのときの様子を思い出して語ります。

ー私たちは20人がかりで、先生を取り囲んで、身体の空いているところは全部こちよこちよしました。

先生は、聞いたことないほど素つ頓狂な声でゲラゲラ笑って、顔を真っ赤にして、必死に暴れるわ暴れるわ……

ーマグロみたいに身体をビチビチさせて、ドタバタってひっくり返って笑い転げました。

それですぐに私たちはこの作戦に手ごたえを感じました。

ー私たちは20人もいましたから、役割を分担して先生が暴れたり逃げたりしないように、手足をおさえつけました。先生は見たことがないほど焦っていて、本当にくすぐりが苦手みたいでした。怯えてるようにも見えました。

ー私たちは、逆にすっかり立場が逆転して余裕ができたので、『ほらほら、じつとして』『たっぷりこちよこちよしてあげるねー』みたいに、先生をからかったり笑う声も多くなってきました。

「先生は5分くらい軽くこちよこちよしただけで、『もうやめて』『許して』とか、『ごめんさい』とか言い始めました。

「あんまりあつけないんで、私たちはむしろ「さっきの態度はなんだつたのよ?」ともつと意地悪したくなりました。多分、放課後18時くらいからくすぐりはじめて、結局、夜中の2時くらいまではずっと交代でこちよこちよしてたと思います笑

「とくに先生つたら、おしりが弱点だったみたいで笑
なんか恥ずかしいですよね笑だから丁寧に一杯くすぐつてあげました。

「必死に手でおしりを隠したり、身体をねじって逃げようとするもんだから、皆で逃げれないように、おしりペンペンの格好でおさえつけて、スカート脱がしてこちよこちよしました。

「本当、先生、おもしろくて。おしりこちよこちよで半狂乱になって笑い狂っちゃって(笑)

おしりなんて、普通そんなにくすぐりたいかなあ? 笑

「悠里ちゃんが『でっかいお尻だからくすぐりやすいね』って言って、何人で同時にこちよこちよできるか試そうって言い出して。

「10人くらいで同時におしりこちよこちよしたんです。下着の上からですけど、割れ目もおしりの穴も、隙間なく全部。

先生、笑い過ぎて息できなくなりました(笑)

「皆、テンションあがって興奮してたから。
誰かが『足の裏こちよこちよしたげる』って靴下脱がしはじめて。

そしたら別の生徒が『おっぱいもくすぐつてあげるね』って先生の服脱がしはじめて。

「冷静な女の子の何人かが『先生を脱がすのはちよつとまじいんじゃないかな』って止めてたけど、もう私たちも暴走してたんで笑 結局、誰がやったのかよくわからないまま、先生、気づいたら素っ裸になってたんです笑

すつぽんぽんですよ、やばいですよね笑

―それで、また裸の先生を20人がかりでコチヨコチヨして。

―もう20人もいると、くすぐるところ、なくなっちゃうんですよね。空いてるところはどこでもいいからコチヨコチヨしようみたいな。もちろん、おへその穴とか、耳の穴とか、おしりの穴とか、全部、指いれてこちよこちよしました。

―普通におま〇こをこちよこちよしてる子もいましたよ笑

―『先生の自慢のおっぱいもこちよこちよしてあげるねー?』とか、『淫乱なおま〇こも罰としてこちよこちよの刑だよ?』とかいって、先生の身体のあいてるところは、全部、好き勝手にこちよこちよしました。

―すぐく必死にアソコを手で隠そうとしてて、可愛いかったです。

やっぱり女子生徒にアソコをいじられたり遊ばれるのはやなんですかね。『隠そうとした罰』とかいって、押さえつ

けて、余計たっぷりこちよこちよしてあげました(笑)

―先生ったら、汗ぐつしよりでゲラゲラ笑ってるのに、乳首びんびんだし、アソコからはトロトロのがすごい溢れてきて糸ひいてるし、で、めっちゃ笑いました。『ねえ、先生、なんで興奮しちゃったの?』『こちよこちよ気持ちいいねえ?』『変態でごめんなさい、でしょ?』とかいいながら、全身こちよこちよしました。

―先生は、ヨダレと鼻水を垂らしながら『もうぐずぐずり許じでくださいっ』って言ってました(笑)

―私たちも集団で強気になったので、もう先生はオモチャ状態でした。

『ん? どこを許してほしいの? 言ってごらん?』とかいいながら、こちよこちよしてたら、泣きながら『おしりの穴』とかいいはじめて(笑) ずっとそこを一番やめて欲しかったんだって思うと、なんか…恥ずかしいでしょ?

「もちろん、『おしりの穴は許してください』って何回も言わせたあとに、先生をうつ伏せに寝かせておさえつけて、皆で足を広げて、おしりの穴を筆でこちよこちよしてあげました。『こんなところが一番くすぐりたいの？ やっぱ変態じゃん』っていいながら。
ヒ―ヒ―ゆってヨダレ出して笑ってて、面白かったです。

「…おしりの穴ってそんなにくすぐりたいんですかね？ 多分、先生だけかな？ 変ですよね？」（笑）

「―せっかく自分から素直に弱点を教えてくださいましたので、おしりの穴をたつぷりこちよこちよしながら『2度と調子に乗りません』って約束させました。腋の下とか足の裏も激弱だったので、たつぷりくすぐってあげました。」

女子生徒たちのくすぐりのターゲットになったのは、由香里先生だけではありませんでした。

1つ隣の町の別の学校でも、大人の先生をくすぐりで屈服させたという武勇伝は、生徒同士のあいだで自慢話のように広まっていました。負けず嫌いな女子生徒たちは「私たちの学校でもやってみよう」といいだします。1つの学校で生まれたブームは、大人の知らない間に、密かに伝染するように広がっていきました。

隣の女子生徒たちはもつと過激でした。

なんと彼女たちは、1年C組担当の国語の博美先生23歳、2年D組担当の仁美先生21歳、保健室の里中先生20歳の3人をまとめてくすぐりで屈服させてしまったのです。

放課後の誰もいない夜の教室。

3人の大人たちが教室に集められていました。

博美先生、仁美先生、里中先生の3人は、教室の真ん中に並んで立たされていました。3人ともが、女子生徒たちの前ですつぽんぽんの格好のまま、両手を頭の後ろで組み、足を肩幅に開き、まっすぐ前を向いて背筋を伸ばす格好で起立しています。

学校の教室という場所で、大人の女性3人がおっぱいを並べて立たされているどこか異常な光景。

その周りをぐるつと30人くらいの女子生徒たちがニヤニヤしながら取り囲んでいました。

最も若い博美先生はまだ大学を卒業して教師になったばかり。

顔が小さく身体のラインも細くて華奢で、いかにも今どきの若い子のような体型です。可愛らしい小さくてAAカップの胸は、隣に並んでいる仁美先生や里中先生の爆乳のせいで、さらに小さく平らに見えます。まだあどけなさの

残る顔を恥ずかしきで真つ赤にそめて、プルプルと震えながら我慢しています。

横に並ぶ仁美先生は、夫も子供もいる最年長の31歳。その身体は豊満の一言につきます。果実のように大きな胸とおしり。柔らかそうな熟れた身体と肉付き。いやらしく覆い茂った陰毛。大きな乳輪に少し長めの乳首。男性の性欲をそるようなフェロモンのある身体を披露しながら、屈辱そうに顔を歪めています。

一番右に並ぶのは、男子人気も高い里中先生です。スレンダーでありながら胸とおしりは大きく、腰はしつかりとくびれ、まるで峰不〇子のような綺麗なモデル体型。美しく整った顔は、ただ綺麗なだけでなくプライドの高さや女の自信を感じさせる強気な顔つき。その里中先生は、恥ずかしい格好をさせられてるにも関わらず、3人の中では最も平然とした顔を装っています。

3人の先生たちは、いずれも何らかの理由で女子生徒たちから反感を買い、こちよこちよ責めにされた挙句、弱みを握られてしまい、今日ここに裸で立たされているのです。

「はいっ、それじゃあ、先生たち3人には
今から『おっぱい踊り』を練習してもらいまーす！」

1人の女子生徒がそういうと、教室内から歓声があがりました。

「今から先生1人につき、生徒5人1組になってこちよこちよしながら

おっぱい踊りを指導してあげてくださいー！

一番、上手に踊らせることができたチームは優勝でーす！」

「得点は、面白さ、いやらしさ、意外さ、恥ずかしさ、みつ

ともなさで

評価してポイントをつけまーす!

ぜひ高得点を狙ってくださいーい」

女子生徒はおどけたような声でルール説明をつづけます。

「先生は、両手を下ろしたりしやがんだりするのは禁止です！

その場を動かさずに、一生懸命、おっぱいを揺らしながら踊ってくださいーい

一番下手くそだった先生は罰ゲームでーす!

もし勝手に両手を下ろしたりしたら、罰として30人がかりでこちよこちよしまーす!」

また教室の女子生徒たちから歓声があがります。

女子生徒たちが口々に「おっぱい踊りだつて、やば」「何それ、恥ずかしーっ笑」「里中先生もやるの? 想像できないんだけど笑」と、楽し気な声が響き渡ります。

女子生徒に「おっぱい踊り」という屈辱的な要求をされ、大人たち3人は内心穏やかではありません。

博美先生は…かわいそうに。ますます茹蛸のように顔を真っ赤にしながら、今にも泣き出しそうな顔をしています。里中先生はまだ平気な顔を装っているものの、周りの女子生徒たちが「ふふ、見て、里中先生ったら平気な顔しちゃつてかわいいーっ笑」「ああ見えて、こちよこちよ激よわだもんねえ、あー、里中先生の担当がいいなあ」などと聞こえるように言うので、少し顔がひきつっています。一番、黙っていられなかったのは仁美先生です。

「…あ、あんたたち、こ、こんなことして…楽しいのっ?!
い、いい加減にしなさいっ!」

いつもの怖い仁美先生の声に、一瞬、教室がシーンとします。

しかしすぐに教室には、ドツと笑い声が溢れます。それもそのはずです。おっぱいも恥毛も丸出しの先生が、両手をしっかりと頭の後ろで組んだまま怒ったところで、怖いはずがありません。むしろ滑稽ですらあります。

「それじゃ、1組目からはじめてください」

アナウンス役の女子生徒も、キョトンとした顔をしたものの、すぐにくすくすと笑っていいました。

「はい、仁美先生だけ1組8人に増やします！

たつぷりこちよこちよして欲しいDMちゃんみたいなので、皆で交代でかわいがってあげてください」

女子生徒たちが元気にノリよく「はい！」と返事をしました。

仁美先生は、「ぐくぬっ」と屈辱そうに唇をかんだものの、黙ってしまいました。その様子を見て他の2人の先生も、ますます何も言えなくなっていました。

勝手におっぱい踊りを強制させられた挙句、理不尽にもおっぱいが小さいことを年下の女子生徒たちに叱られる博美先生。

大人の女性としてのプライドはズタズタです。

「罰としておっぱいコチョコチョコの刑ね

じつとしてなさいよ?」

そういつて女子生徒の1人が、博美先生の両乳首を正面から5本の指でとらえ、優しくこちよこちよします。

「ぢよっつ、いーひひひひひひひっ

うっひひひひひひひっ、そこだめっ、いきひひひひひっ」

「こら、先生! 動かないのっ」

「ひーひひひひひひひっひっ、きっしししししっ、いひひひっ」

胸のサイズこそ小さいものの、乳首の感度は抜群の博美先生。

弱点の乳首を女子生徒に優しくこちよこちよされて、思わず恥ずかしい笑い声をあげてしまいます。

生徒に「姿勢を崩してはいけない」と命令されているせいで、乳首のこちよこちよが厳しいお仕置きのように感じられます。

両手を頭の後ろで組み、背筋をピンと伸ばして胸を前に突き出した格好のまま、乳首のこちよこちよを我慢するのは、大人の女性でも簡単ではありません。

「まったく先生つたら。

ペタンコおっぱいの癖に感度だけはいいのね?」

そう女子生徒たちに呆れられながら、乳首を優しくこちよこちよされつづけて、ヨダレを垂らす博美先生。

そして一番、悲惨な目にあっていたのは…。
最初に生徒たちを叱りつけた結果、8人がかりでこちよこちよされることになった仁美先生です。

仁美先生は以前まではとくに厳しい先生として有名で、いつも生徒を叱りつけてばかりだったので、女子生徒たちの恨みも溜まっていました。さらに美人ではあるものの、一番、生徒たちと年齢の離れている仁美先生に、同情したり感情移入できる生徒たちは多くありませんでした。

大人の男性から見ると一番エロくて美味しそうな身体をしている仁美先生。

しかしまだ子供の女子生徒たちにその魅力はわかりません。誰も仁美先生のエッチな姿を見たいとは思っていませんでした。女子生徒たちの頭にあるのは、「懲らしめてやろう」「恥をかかせてやろう」という復讐心だけでした。

「ほーら、こちよこちよこちよこちよこちよこちよ」

「こちよこちよこちよこちよこちよこちよ」

「あーはっはっはははははっ!! あーはっはっははははっ、許してよおーひひひひひひひひひひ、

死んじやうつ、おがじくなるわよーほほほほほほっ!」

里中先生ほどではないにせよ、人一倍くすぐったがりの仁美先生。

30歳をこえると、女性の身体はますます敏感になります。日常でくすぐられる経験がなくなるだけで、実は一番くすぐったがりの年齢は30代の女性かもしれませぬ。

とくにお腹をモミモミされたり、腋の下をこちよこちよされるのは、くすぐったくてくすぐったくて我慢できるものではありません。

教室で裸にされて、若い女子生徒たちに8人がかりでこちよこちよされたら堪りません。

しかし仁美先生には、他の2人とくらべても最も屈辱的な命令が課されていました。

30歳にもなる大人の女性。

しかも夫も子供もいる母親の女性が全裸でおっぱいを振りながら「おち○ぽ」と何度も叫ぶ姿は、正視に耐えない光景でした。

教育者でありながら、女子生徒にこちよこちよされて服従させられ、恥もプライドも捨てて、ゲラゲラ笑いながらおっぱいを揺らし、卑猥な言葉を叫ぶ先生の姿に、教室の女子生徒からは呆れたようなクスクス笑いや失笑が漏れました。

「なに、あれ、恥ずかしー笑

あの先生、プライドとかないのかな？」

「おちんぼって…。下品すぎて面白くないんだけど」

「くすくす、いい気味じゃん、私はいいと思うけどなあ」

周りの女子生徒たちが口々に感想を漏らします。

「えー、仁美先生。みっともなさポイントを獲得です！でも仁美先生は、口答えした罰でマイナス点のスタートなのでもっと頑張ってくださいー」

アナウンス役の女子生徒が、気の抜けた声でそういいました。

大人の女性3人が、教室の真ん中で、全裸で女子生徒たちにごちよこちよされながら、笑い狂って必死におっぱいを振り回す異様な時間は、その後、15分にわたり続けられました。

「えー、では、先生たちのおっぱい踊り披露会はここまでにしませーす！

それでは、得点を集計するので、しばらくお待ちくださいー」

美先生と里中先生はゾツとする思いで見っていました。女として確実に人生が終わるような辱め。どんな美人でも、人格者でも、品格のある女性でも、こんなことをされたらもうプライドを保つことはできません。

もしかしたら、あれをさせられるのは自分だったのかもしれない。羞恥心の強い博美先生は、尊敬する瞳先生のことを気の毒に思いながらも、自分でなくてよかったと心底ほつとしました。

女子生徒たちから見れば、瞳先生は憎くてうるさい先生かもしれません。

しかし博美先生や里中先生から見ると、瞳先生は、30歳の理想のような美人で、知的で頼りがいのある憧れの先輩でもありました。そんな瞳先生が目を覆いたくなるような恥態を晒しているのを茫然と見ていました。

「先生のせいで負けちゃったじゃん、約束通り、お仕置きだからね？」

「そういえば、先生つて娘さんがいるよね？ 私たちの4つくらい年下の女の子だよねー 今度、連れてきなよ？」

「うふふ、先生がおっぱい踊りをサボった罰として 連帯責任でこちよこちよしてあげるね」

「親子で並べて裸にしておっぱい踊りの練習させてあげる 笑」

「くすくす、娘さんにも『おちんぼ』つて叫んでもらおっかなあ？」

「あはは、それは鬼畜ー」

残酷な女子生徒たちの要求に、母親でもある瞳先生は泣きながら懇願します。

翌日の夜

いつものように誰もいない校舎。

その体育館だけにあかりが燈っていました。

体育館に集合したのは女子生徒たち40人ほど。

里中先生と博美先生の姿もありました。

この学校の体育館の壁ぎわには、多くの学校と同じ「助木（ろくぼく）」という体操用具があります。ほとんどの人がその正式名称を知らないものの、見たことのあるはずで、体育館に必ずある謎の木のはしご、よじ登りやぶら下がりを使う棒のような運動具です。

そこに2人の女性が並ばされて立たされていました。

1人は瞳先生。

その大きなおっぱいと肉感的なカラダ、大きなおしり、生い茂った陰毛は、見慣れた女子生徒たちにとっては、遠くから見ても瞳先生だとわかる裸でした。瞳先生は、精一杯両手を高く真上に伸ばした格好で手首を肋木に縛られていました。口にはタオルを巻かれて喋れないようにされています。

もう1人は瞳先生の娘。今年で4年生になる女の子の葵ちゃんです。

母親と同じように裸にされて、両手をバンザイした格好で肋木に手首を縛られています。葵ちゃんは私服のまま、今の女の子らしい可愛らしいフリルのついたブラウスに、ジーンズ素材のスカートを履いています。

葵ちゃんは状況が全く飲み込めないまま、母親と同じく口にタオルを巻かれて喋れないようにされていました。

「それではただいまより、

連帯責任！ 親子こちょこちょ罰ゲーム大会をはじめまー

す！」

マイクを持った女子生徒の1人が、まるで運動会の催しでも始まるかのような調子でアナウンスします。
体育館の女子生徒たちから声援があがります。

1人の女子生徒がマイクを持って葵ちゃんに近づく、優しく語りかけはじめました。

「あのね、葵ちゃん

葵ちゃんのお母さんがすごく悪いことをしたからね、だから罰として、皆の前ではだかんぼにしてね、

こちよこちよしてお仕置きすることになったのよ？」

「それでね、

葵ちゃんのお母さんがした悪いことは、葵ちゃんの悪いことでもあるの。

だから葵ちゃんのお母さんがした悪いことは、葵ちゃんも一緒に反省しなくちゃダメなの

わかるよね？」

いきなりそんなことを言われても、わかるはずがありません。

口をタオルで塞がれて喋れないかわりに、葵ちゃんは首をブンブンと横にふりました。

しかし女子生徒は、ニコニコと笑顔のまま、葵ちゃんの反応を無視して話をつづけます。

「ほら、横のママ見て？」

こんなに大勢の前でパンツも履かせてもらえないの大人なのに恥ずかしいねー？ 笑

体育館の女子生徒たちがドつと笑います。

でもね、これは葵ちゃんのお母さんが悪いことしたからなの罰って恥ずかしいものなの」

いきなり腋の下をこちよこちよされて、葵ちゃんは飛び跳ねるように暴れはじめました。

「どうやら親子そろって、相当こちよこちよは苦手なようです。」

口をタオルで塞がれている息苦しさもあるのかもしれない。まだ片手で軽く腋の下をこちよこちよと弄んでいるだけでも悶わらず、葵ちゃんはくぐもった高い声をあげながら笑いまくり、男の子のようにカラダを元氣よくばたつかせました。

もつとも葵ちゃんのカラダは、ギリギリ床に足のつま先が届くような高さで、両手を肋木に縛られているため、それほど大きく暴れることはできません。

「うふふ、あれあれ？」

葵ちゃん、こちよこちよ弱いんですねー？

もしかして…お姉さんに嘘ついたのかなー？」

葵ちゃんは、なおも執拗に腋の下をこちよこちよする女子生徒の指に笑い悶えながらも、必死に首を横に振ります。

「そもそも、口を塞がれているのですから、「得意か？ 苦手か？」という質問に答えることなど不可能です。」

女子生徒はニコニコしながら、こちよこちよの手を止めるといいました。

「ママと同じで悪い子だなー、

悪い子には恥ずかしいお仕置きです」

そういつて葵ちゃんズボンとパンツに手をかけました。必死に嫌がつて葵ちゃんを無視し、女子生徒は葵ちゃんズボンとパンツを、アソコが見えそうなギリギリのところまで下げてしまいました。

可愛らしい女の子のツルツルの恥丘とお股のラインが丸出しになります。

あと僅かでもパンツを下げられたら、恥ずかしい割れ目ま

は大人の女でも半狂乱になって笑い悶えるような
繊細かつ巧みな指遣いでした。

葵ちゃんのズボンとパンツはおしりを抜けて、ストンと足
首まで落ちてしまいました。

「うふふ、どうしたの？」

そんなに元気よく暴れちゃって…。

自分でパンツ脱ぎたくなつたのかな？」

「お姉さんに恥ずかしい割れ目、見せたくなつたんでしょ？」

笑

「葵ちゃんはエッチな女の子だなあ」

「ふっふっふっふっふっふっふっ！

むふふっふっふっふっふっふっふっふっふっふっ！

ふっふっふっふっ！！」

精神的に追い詰めるような、恥ずかしい言葉を投げかけながら脇の下をくすぐり続ける女子生徒。

とうとう葵ちゃんのズボンとパンツがずり下がり、女の子の割れ目が丸出しになりました。

「あはは、やだ、下半身丸出しー」

「葵ちゃん、恥ずかしいねー」

「ママとお揃いの格好だねー」

周りの女子生徒たちが口々に葵ちゃんをからかいます。

下半身丸出しの格好を、年上の女子生徒たちに笑われながら、一斉に「恥ずかしい」「恥ずかしい」といわれたら、どんな女の子でも泣きたい気持ちになるでしょう。

葵ちゃんは涙目になりながら、顔を真っ赤にして必死に内股になり、クネクネと恥ずかしそうに身体を振ります。

しかしいくら努力したところで、両手を縛られているので、自分でパンツを上げることは一生できません。

「うふふ、

ママと同じ恥ずかしい格好になっちゃったねー？

葵ちゃん、パンツ履かせてほしい？」

葵ちゃんは必死に内股になりながら、コクコクと激しく首を縦にふって頷きます。

しかし女子生徒は、泣きそうな葵ちゃんの頭をナデナデしながらいいました。

「だーめ」

次の瞬間、女子生徒は葵ちゃんの可愛らしいフリル付きの白いブラウスの裾を掴まんで、バンザイしている葵ちゃんの顔のあたりまで服を捲りあげてしまいました。

ちようど顔を覆い隠すぐらいのあたりまで、ブラウスを脱がせるように捲りあげ、手慣れた手つきでその位置に結び目をつくります。そして捲れたブラウスが元に戻らないようにしました。さらに葵ちゃんが服の下に着ていたタンクトップを、力づくで強引にめくりあげ、おっぱいの上まで捲ってしまいました。

一連の動作は流れるように早く、あまりの突然のできごとに、葵ちゃんは、一瞬、何をされたのか状況を呑み込めませんでした。

いま、葵ちゃんは自分のブラウスで顔を覆われ、何も見えない格好のまま、おっぱいも下半身もすっぱんぽんというとてもマヌケで恥ずかしい格好にされてしまったのです。体育館の女子生徒たちからドツツと笑い声が溢れます。

「あはは、なにあの格好ー笑」

「葵ちゃん、おっぱい丸見えだよー、かわいいそー笑」

体育館にこだまする笑い声で、自分のとつても恥ずかしくてマヌケな格好に気づいた葵ちゃん。

しばらくもがいた後、どうにもならないことがわかり、恥ずかしさのあまり泣き出してしまいました。

しかし女子生徒は、泣くことも許しませんでした。

「こーら、葵ちゃん

お仕置き中に泣いたりしちやダメでしょ？

反省してないみたいじゃない」

そういつて、また両手で葵ちゃんの腋の下をこちよこちよしはじめます。

泣いてるときにくすぐられて無理やり笑わされるのは、人間にとって屈辱的です。笑いたい気分でもないのに、無理やり笑うことを強制させられることは、まるで人としての尊厳を否定されるような惨めな気持ちになります。

それはまだ若い葵ちゃんでも同じ気持ちでした。

「ほらほら、葵ちゃん、泣いちゃダメでちゅよ〜？

ほーら、笑って笑って〜こちよこちよこちよ〜

あれあれ〜？ 葵ちゃん、楽しくなってきたでちゅね〜？」

葵ちゃんはもう4年生の女の子です。

それをまるで赤ちゃんをあやしつけるようにこちよこちよされ、無理やりゲラゲラと笑わされ、葵ちゃんはこの日はじめて心から「悔しい」と感じました。目の前の意地悪なお姉さんが、憎くて悔しくて仕方ありませんでした。

しかしいざお姉さんに脇の下をこちよこちよされると、口からは馬鹿みたいに笑い声が溢れてでて、口を覆うタオルをヨダレでびちゃびちゃにしました。お母さん譲りの敏感さで、くすぐったくてくすぐったくて仕方ありませんでした。

なすすべなく、女子生徒のお姉さんの思い通りにゲラゲラ笑わされる滑稽な自分に、葵ちゃんは情けなさすら感じたのでした。

午後21時頃の体育館。

母親の瞳先生と娘の葵ちゃんが、2人並んで、今度は室内用の鉄棒に両手をロープで拘束されています。体育館の床の穴にポールを差し込むタイプで、高さの調整が可能な移動式の鉄棒です。2つの鉄棒は、ちょうど瞳先生と葵ちゃんがバンザイしたときの両手の高さに合うように調整されています。

2人は両足を地面につけて、かつ膝を軽く曲げることができ、かなりの高さに調整された鉄棒に、バンザイした姿で両手を縛られています。両足は少し曲げた状態で開かされ、左右の鉄棒のポールにそれぞれ拘束されています。左右の足を少し地面から持ち上げたり、腰やおしりを動かすくらいの余裕はありますが、逃げたり暴れることはできません。

大きな違いは、さつきまで服を着せてもらっていた葵ちゃんが、すっぽんぼんになっていることでした。

30歳のグラマーな母親の瞳先生。魅惑的なおっぱいに、どっしり大きなおしり。身体は柔らかく肉感的。いやらしく茂る陰毛。

一方、その横に並ぶ葵ちゃんの裸。背も小さくぺったんこの細い身体。ほとんどないおっぱい。可愛い割れ目。

親子として顔の面影は似ているものの、カラダは全く対照的な2人。その2人の裸が並んでいることで、あたかもお互いの身体的な特徴を強調して引き立たせているようでした。

「それでは、いよいよ今日の本題です、

2人に並んでごちょごちょ裸踊りをしてもらいましょー！」

体育館がどっと沸きあがります。

「まずはママの瞳先生から、

お手本のおっぱい踊りをしてもらいまーす！

娘さんの前で、昨日、練習したダンスを

しっかりと踊ってくださいね？」

昨日の瞳先生をくすぐった女子生徒たちからドツと笑い声がおこります。

瞳先生は、怒りと諦めの入り混じった絶望的な表情のまま、大きな乳房を垂らしてうなだれています。連日による気のおかしくなるようなコチョココチョコ責めに、すでに女子生徒たちに抗議したり反抗する意思は削がれているようでした。

「次に、お手本をしっかりと見たあとに、

葵ちゃんも裸踊りをやってみてもらいまーす！」

「葵ちゃんはまだおっぱいが無いから、かわりに

恥ずかしいガニ股ダンスとおしりフリフリダンスを練習してもらいまーす！」

また体育館からドツと笑い声が溢れます。

羞恥心の芽生える年頃の女の子に、ガニ股ダンスやおしりフリフリダンスは、かなりの厳しいお仕置きです。

「うふふ、葵ちゃん上手にできるかなー？」

「かわいいお尻、いっぱいフリフリして反省しようねー？」

「葵ちゃんには恥ずかしいワレメ見せながら、一生懸命、腰へこへこしてもらおうからね？」

まだ元気のある葵ちゃんは、女子生徒たちに必死に何かを抗議しながら両手両足をバタつかせています。

もとも口をタオルで覆われているため、何を喋っているかまではわかりません。

「……それから、今日、くすぐり役になつてくれるのは、

特別ゲストの里中先生、博美先生のお2人で―す」

瞳先生と葵ちゃんをグルつと取り囲む女子生徒たちのギャラリから拍手と「ひゅーひゅー」という歓声がおこりま
す。

女子生徒たちの集団の人混みの中から押し出されるように、博美先生と里中先生の2人が瞳先生の前に連れ出されました。

2人とも困惑したような躊躇した表情を浮かべています。

「…もっ!! もごおおっ!!」

(…あ、あなたたち、なんでっ!!)

思わず瞳先生が抗議の声をあげます。

自分1人だけが今日も裸にされて女子生徒たちにこちよこちよされるのに、2人の後輩の先生たちは許されて、当たり前のように服を着て自分の前に立っているのです。しか

も暴走する女子生徒たちを止めようともせず、大人しく言うことを聞いています。理不尽さと怒りで思わず瞳先生の顔が紅潮します。

女子生徒の1人が、博美先生と里中先生に耳打ちします。

「わかつてるよね、先生たち？」

2人がかりで瞳先生をこちよこちよして、恥ずかしい踊りを練習させてあげてくださいね？

これは大役だよー？」

「くすす、もし上手にできなかつたら罰として

男子生徒の前で、2人並んで裸踊りしてもらうからね？

せいぜいがんばってねー」

2人の先生の表情が凍り付きます。

男子生徒たちが見ている前で、おっぱいもアソコも丸出しで裸踊りをさせられる自分たちの悲惨な姿を想像して、身の毛のよだつ思いがしました。2人の覚悟は決まったよう

でした。

女子生徒の1人が、瞳先生の口を覆うタオルを外していいました。

「ちよっ…あ、あなたたちっ！」

この異常な状況みて何とも思わないのっ？

生徒たちを止めようと思わないわけ？ それでも教師なの？」

口が自由になった瞳先生は、怒りにまかせて博美先生と里中先生の2人を叱責します。

本来なら女子生徒たちを真っ先に叱るべきですが…。瞳先生は、自分だけがこのような理不尽な状況に置かれていることがどうしても許せないようでした。

2人の先生は、まさか（あなたが1番女子生徒から嫌われていたからです）とは言えず、申し訳なさそうにうなだれていました。

「そこでぼーっとみてないで、これ、ほどいてよっ!？」

それから娘も今すぐほどきなさいっ！ これは大問題よ？

教師が生徒たちに屈するなんてっ！ 恥をしりなさいっ！

大体、あなたたちは…」

怒りの止まらない瞳先生を、マイクを持った女子生徒が面倒くさそうに遮っていました。

「はいはい、もういいですか、

それじゃ、お仕置きタイム☆スタートです」

葵ちゃんのママ、おしりフリフリ上手だねー？

葵ちゃんも後でやるんだから、しっかり見て勉強してね？」

女子生徒の1人が優しく葵ちゃんの顔を瞳先生の方に傾けていました。

葵ちゃんはタオルに覆われた口をもごもごさせていました。

博美先生は、躊躇しながらも申し訳なさそうに瞳先生の耳元でいいました。

「ご、ごめんなさい…。瞳先生、

仕方ないんです。昨日みたいにおっぱいフリフリしてく

ださい…

できれば…『おっぱいぼよよん』って叫びながらやって

欲しいんです…」

これも女子生徒たちの要求でした。

瞳先生の顔がさらにみるみる屈辱で真っ赤にそまります。

なんで年下の博美先生にそんなことを命令されなくちゃならないのか。瞳先生はあまりの悔しさと屈辱に反発していました。

「あはっはっはははははははっ!! はーははははははっ、いつ、いやよーっ!!

っはーははははははははははっ、ぜ、絶対やらないわよーはっははははははははははっ!!

瞳先生はくすぐったさに大きなおしりを揺らしながらも、頑なに昨日のような『おっぱい踊り』をすることを拒否しました。

博美先生と里中先生の2人は、なんとか瞳先生におっぱい踊りをやらせようと躍起になっておしりをこちよこちよします。

2人がかりで、合計20本の細長い大人の指が、瞳先生の汗でぐっしょりのおしりの上を縦横無尽にこちよこちよと這

瞳先生は、里中先生におへその穴をほじほじこちよこちよ
され、博美先生におしりの穴をなでなでこちよこちよされ、
その屈辱と怒りに涙を流して笑い悶えながらも、決しておっ
ぱいを振ろうとはしませんでした。

「瞳先生、思ったよりはがんばったよね」

「本当、意外と時間かかっちゃったね。」

でも、もうそろそろ陥落でしょ」

「おっぱいダンスさせるだけなのに、1時間もかかっちゃったね。」

先生同士にくすぐらせたのが失敗だったかなー？

瞳先生、どうみても意地になつてたもんね」

「里中先生も博美先生も、だらしないなあ

私たちの助っ人がなかったら、どうなつてたことやら」

女子生徒たちが他人事のような感想を交わし合います。

瞳先生は、結局、1時間にわたるこちよこちよを我慢しつづけました。

しかしその我慢も、もう限界に達していました。

女子生徒の1人が、ある「助っ人道具」となるアイテムを与えたからです。

「んんん…っ、かつ、かゆい…い…い…っ、

かゆい…い…い…っひい…い…っ、おねが…い…っ、ほ…ど…い…て…え…え…っ」

瞳先生は、顔を真っ赤にし、涙を垂れながら身体をいやらしくクネクネと振つて泣き叫んでいました。

両手と両足を鉄棒に拘束されたまま、惨めなくらい必死に内股になり、太ももと太ももをモジモジと擦りあわせています。メロンのように大きな乳房が悩ましく左右に揺れ動きます。口元からはだらしくヨダレが垂れ、おっぱいをビシヨビシヨに濡らしています。

博美先生と里中先生の2人は、なんと日本一痒いといわれる山芋をすりおろしたものを、筆にたっぷり付けて、それを瞳先生の乳首、おま〇こ、おしりの穴の3箇所にとっぷり塗り込んだのでした。女子生徒の1人が、補助アイテムとして2人の先生に手渡したものです。

「……ひ、瞳先生が意地をはるから悪いんですよ?」

「わ、私たちもここまでしたくはなかつたんですからね」

博美先生と里中先生の2人は、みつともなく内股でヨダレを垂らして「ほどいて」と懇願する瞳先生を見下ろしながら、開き直ったように素晴らしいました。

2人の先生は「どう使ってもいいよ? 笑」といつて手渡された山芋を、瞳先生のおま〇こやおしりの穴といった恥ずかしいところばかりにたっぷり塗りました。2人の先生は、強情に意地をはっておっぱいをフリフリしようとしないう瞳先生に、だんだん焦りと怒りすら感じていまし

た。

そのため「やめて」「許して」という瞳先生を無視し、おっぱいの先端、クリ〇リスやピラピラの内側にまで山芋をたっぷり丁寧に塗り込んだのです。女性ですから、手足を縛られたまま、そんなデリケートな箇所に山芋を塗られたら堪りません。

「……んんんんつ!! んおおおつ!! がゆいっいいいっ!

おねがいつ!! :ちよつと!つ、ちよつとだけ掻いてええ

ええええつ!!

かゆいっいいいっ!!」

瞳先生は、もはや恥もプライドも捨てて、必死におっぱいの先っぽを2人の先生の方に突き出しました。

おっぱいをみつともなく左右に揺らし、乳首を突き出し、太ももを擦り合わせ、泣き声をあげました。

おっぱい、おま〇こ、おしりの穴、女性にとって一番、デリ

ケートな3箇所を襲う猛烈な痒さ。手足を縛られているせいで、自分ではどうすることもできず、誰かに泣いて懇願しておねだりして触ってもらおうことしかできません。もう瞳先生に意地をはる余裕はなくなっていました。

一方、博美先生と里中先生の2人は、やっと屈服した瞳先生の姿にホツとして余裕をとりもどしたようでした。

目の前でみつともなく泣きながらお股を擦りあわせて、乳首をフリフリしてる瞳先生に意地悪したくなりました。

「…まったく、みつともないですね、先生

どこが痒いんですか？

どこをどうして欲しいのか、言わないと私たちもわからないでしょ？ 笑」

博美先生はそう冷たくいいました。

「…ひっ、ひぐっ…んんんんっ!!

…ちっ、ちくびいっ…乳首かゆいっ、かゆいのおっ！
んんっ、お願いいいいっ！ つちよ…ちよつと摘まんてえええええっ、

摘まんて…こ、コリコリして欲しいのおおおおっ」

人前でなりふり構わず、信じられないほど恥ずかしいことをいう瞳先生。

女子生徒たちがドッと爆笑します。

「くす、先生、そこでもいいんですか？

正直に全部いわないと触つてあげませんよ？」

博美先生はさらに意地悪をいいます。

「…んんんんんんんんっ!! んっ！

ひぐっ、お、おま〇こもかゆいわよおおおおおっ！

ひっく

おま…おま〇〇、指で撫でて欲しいいいいいっ！」

「…おつ、おしりの穴もよおおおおつ!! ひつくつ

おしりの穴も…さ、さつきみだいにいつ、指でこちよこちよしでえええっ！」

「くすくす、

何ですか？ 先生、もう1回言つてください？」

「おじりの穴つ、こちよこちよしてぐだざいいいいっ！」

いやらしくおしりをくねらせ、号泣しながら懇願する瞳先生。

さつきまであれば嫌がつたおしりの穴を「こちよこちよしてください」という瞳先生の姿に、女子生徒たちはキヤツキヤと喜びながら、スマホのカメラで動画を回しています。横で母親の姿をみている葵ちゃんまでも、顔を真っ赤にして俯いてしまうほど、見ていられない姿でした。

「そうね、よくわかりました。」

でも瞳先生、人をお願いする前に順番があるでしょ？
まずはおっぱいフリフリ踊りしてくれなくっちゃ」

「その場で上下にジャンプして胸を上下に揺らしながら、『おっぱいぼよよん』って大きな声でいつて踊つてみてください」

博美先生は、瞳先生を見下しながらそう命令しました。

女子生徒たちから「ひゅーっ」という声があがります。

「やるじゃん、博美先生（笑）どうした？」

「実は結構DSなんじゃないの、あの先生。こわーい」

そういつてくすくす笑います。

瞳先生は悔しそうに唇を噛みましたが、痒さにはどうにも抗えないようでした。

「……お……お、おっばいぼよーんっ……」

お、おっばいぼよーんっ……おっばいぼよーんっ……」

そういつて瞳先生は、わずかに足を曲げ伸ばしし、上下にジャンプしながらおっばいを上下に揺らし始めました。女子生徒たちのゲラゲラ笑う声が聞こえます。

いい歳をした大人の女性が「おっばいぼよーんっ」といいながら、全裸で胸を揺らしてジャンプする姿はあまりに滑稽でした。

「声が小さいです、瞳先生

それに……もつと一生懸命、ジャンプできるでしょ？」

やりなおしです」

「……なっ!! ……ぐぐぐっ……」

瞳先生の顔は悔しさと屈辱に歪んでいます。

しかし瞳先生には、選択肢はありませんでした。じつとしているだけでも泣き喚きたくなるほどの痒さが、お股やおっばいを襲ってきます。あまりの痒さに全身から汗がとまらず、涙がこみあげてきます。

「……おっ、おっばいぼよーんんっ!! ひぐっ、

おっばいぼよーんんっ!! おっばいぼよーんんっ!!」

「くすっ、ほら、ママがんばってるんだから。ちゃんと見てあげないとダメよ?」

そういつて一人の女子生徒が、葵ちゃんの顔を無理やり瞳先生の方に向けようとします。博美先生に言われるがまま、泣きながら必死におっばいを揺らしながらジャンプする母親の姿に、葵ちゃんは恥ずかしくて堪らない顔をしています。

「じゃあ、次は、

瞳先生は、悔しさのあまりボロボロと泣きはじめました。

「あーはっははははははっ!! かゆいっ、がゆいのおーー
はっはははっ!!

おねがいますっーははははははははっ!! お、おま〇こ触っ
てよおおおーほっほほほっ!!」

1人の女子生徒が、葵ちゃんの肩をポンと優しく叩いて
いました。

「うふふ、次は葵ちゃんの番だよ?

葵ちゃんも上手にできるかなー?」

葵ちゃんがギョツとした表情を浮かべました。

3人の先生 恥辱のくすぐりおっぱいダンスの刑

発行日 2019年7月9日

著者 くすぐらんど
<https://www.pixiv.net/member.php?id=5597422>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
